

## 論文要旨

ひとり親の父の役割遂行における資源と葛藤

— アイデンティティ理論のアプローチから —

岩下好美

本研究では、多様な家族の一形態とされるひとり親の父を対象として、彼らの家庭と仕事における二重役割の遂行について質的調査を実施した。本稿における目的は三つあり、一番目は、現代のひとり親の父たちの親役割観を探求することである。そのために、子どもたちとの関係性の形成および家事の遂行状況について調査を行った。次に、家庭と職場の両方から高い役割期待を受けていると思われるひとり親の父たちが、どのようにして二重役割を遂行しているのかを提示して、そして、彼らの二重役割遂行を支えるもの、あるいは阻害する要因は何かを明らかにする。最後に、孤立が問題視されているひとり親の父たちが、どのようなネットワークを築いているのか、なぜネットワークが必要とされているのかを探索する。そして、最終的には、多様な家族とされているひとり親家族の父たちの家庭と仕事における調和や葛藤を提示することで、彼らを支援するための方策を見出すとともに、多様性が尊重される社会への道筋をさぐることを試みる。

本調査における調査対象者は10名であり、全て都市部在住で18歳未満の子を持つひとり親の父である。サンプリングはネットワーク・サンプリングでひとり親の父を支援するNPO法人を通して呼びかけを実施した。収集したデータは、ケア役割の分担が可能な親との同居の有無および離別の経緯（生別・死別）で四つにグループ分けをして、生別で父と子のみの家庭がグループ1（四名）、生別で祖父母と同居の家庭がグループ2（三名）、死別で父と子のみの家庭がグループ3（二名）、死別で祖父母と同居の家庭がグループ4（一名）となった。なお、分析にあたっては、継続的比較法を用いて各グループにおける差異の検討を行った。また、本研究では、父親アイデンティティおよび家庭と職業役割に問題関心があることから、分析における理論枠組みとして、アイデンティティ理論的アプローチを用いている。

インタビュー・データを分析した結果、調査対象者たちはケア役割を含めて父親役割を認識しており、特に家事スキルは父親には必要であると考えていた。しかし、同時に稼得役割も重要と考えていたことから、ケア役割と稼得役割が複雑に混在した、現代のひとり親の父アイデンティティが見出された。二重役割の遂行にあたって、まず家庭役割の場合、全ての調査対象者にとって、子どもとの安定した関係

性は、家庭役割遂行における大切な資源となっていた。次に、父と子のみで生活をするグループでは家事スキル、スケジュール管理が資源となっており、子の祖父母と同居しているグループは、祖父母の支援が重要な資源となっていた。しかしながら、生別ひとり親の父の場合、祖父母がひとり親となった息子に対して常に支援的な態度であるわけではなく、感情的な葛藤も見出された。また、生別・死別を問わずに祖父母の高齢化はとどめようがないことから、彼らの懸念材料となっていた。職業役割遂行においては、仕事の自立性および柔軟性が必要とされており、特に父と子どものみで生活をしているグループではこの傾向が顕著であった。他には、祖父母と生活をしている生別の父たちは、自らの親役割を職場の人々に認識してもらうための「社内ポリティクス」を行っていた。

このような、家庭と職場における二重役割遂行には多くの葛藤が伴っており、時には「子どもとどっぷり浸かる」子育てが負担になることもある。しかしながらその反面では、父と子は共同体としてお互いを支えあっているという状況も見出された。ただし、子育てという時間制約の中で、仕事を通じた評価を受けにくいことから、自己評価も高まらないという苦しさもあった。また、祖父母と同居のグループでは、親役割の遂行にあたり、祖父母と子の関係を軸職場やとして、自分の親役割を再配置し、その結果「中性モデル」の親役割観を抱き、そこに葛藤をおぼえる調査対象者も見出された。

このように、様々な資源に支えられて二重役割を遂行している調査対象者たちであるが、同様の状況にあるひとり親の父と出会うことが難しいことから、ソーシャル・ネットワーキング・サービスを活用して、ひとり親父のネットワークを形成する傾向にあった。また、そのネットワークから、ひとり親の父支援のためのNPO団体へとつながり、他のひとり親の父たちとさらに繋がっていかうとする動きもあった。